


博士論文審査および学力の確認の結果

審査委員 (主査)

今福龍人 

武田千香氏の博士学位請求論文「マシャード・ジ・アシスの文学 —『プラス・クーバスの死後の回想』に表われるブラジルの文化的特質—」は、精緻な文学研究の成果と独創的な文化研究の視点を統合する立場から行われた、近年稀に見る優れた成果である。ブラジル文学を代表する作家アシャード・ジ・アシスの最高傑作とされる小説『プラス・クーバスの死後の回想』（一八八一）の難解かつ複雑な物語と文体を、本論文は多角的な視点から詳細に読み解き、物語世界の構造や視覚的テキストの多用、読者を挑発する語り手の攻撃的な態度等を、テキストの細部に渡りながら分析することに成功している。さらに、この小説の読解をつうじて、ブラジル文学だけでなく、ブラジルという文化風土に生きる人々とその社会の原理や特質をも浮かび上がらせようとした点が画期的である。その意義は、狭義のブラジル文学研究の領域のみならず、文学テキストの文化記号論的分析、演劇論的な解釈、パフォーマンス理論との接合などの諸点において、文学研究の新たな方法論を提示するものとして高く評価できる。さらにその結果として、対象とする個別の文学テキストの詳細な分析を超えて、そのテキストが成立した十九世紀後半のブラジルの固有文化の成り立ちとその特性について、きわめて深遠な分析が為されることになった。こうした文学研究と文化研究の有機的な統合は稀であり、ひじょうに優れた業績として評価できるものである。

個別に本論文の優れた特徴をあげれば次のようになる。

- (1) マシャード・ジ・アシスという、研究が遅れている十九世紀ブラジルのもっとも重要な作家にたいする総合的な作家論となりえていること。
- (2) マシャードの原著『プラス・クーバスの死後の回想』を、その翻訳者としての長年の経験と研究成果を踏まえて、多角的に論じ尽くしていること。（それは、研究対象とする原テキストの訳業を終え、書物として公刊してから、そのテキストについての包括的なモノグラフを提示するという一連の行為が、文学テキストの学術研究を認知させる手続きとして不可欠であることをも示している。）
- (3) 作品中にあらわれる道徳観念・心理・家族制度・信仰・学問といった社会制度やシステムにおける X（制度・規範・常識）と非-X（対抗・逸脱・転覆）の価値体系の対立構造を、詳細な文化記号論的視点から分析し、その弁証法的な関係の特性を説得的に記述したこと。
- (4) マシャードの文学的営為にレビューなどのブラジル大衆演劇の構造が深く反映されていることを、世界でも初めて実証的に論じたこと。
- (5) 小説を、語り手と読者をめぐるパフォーマンス的な啓蒙・教育行為としてみなす斬新な視点によって、

近現代小説における「メタナラティブ」の理論の深化に貢献していること。

(6) ブラジル文化の本質にあつて、なかなか言語化できなかった社会遊泳術である「マランドラージェイン」や「ジェイチーニョ」の表現を、文学テキストの分析を通じて言語対象化していること。

以上のような優れた特徴により、本論文は文学研究を通じてブラジルという複雑な歴史を抱える社会・文化を理解するために大いなる貢献をおこなうものだと評価できる。

このような論文にたいし、本審査委員会は、高橋都彦氏（拓殖大学教授／ブラジル・ポルトガル文学）、柴田勝二氏（本学教授／日本近代文学）、柳原孝敦氏（本学教授／ラテンアメリカ思想・文学）、博多かおる氏（本学准教授／フランス文学・文化論）を委員とし、今福龍太（本学教授／文化人類学・ラテンアメリカ研究）を主査として、厳正な審査を行った。総じてすべての委員から、本論文の卓越性について高い評価が得られた。内容の細部には疑問や批判的な意見もわずかに見られたが、論文全体の優れた特質をゆるがせるようなものではないということで、委員全員の意見は一致した。各委員からの審査所感を、主査の判断で要約しながら以下に述べる。

高橋都彦委員

本論文はブラジル文学を代表するマシャード・デ・アシスのもっとも優れた作品のひとつ小説『プラス・クーバスの死後の回想』の精緻な分析から始まり、マシャードの作品だけにとどまらず、多面的なブラジルの人・社会・文化やさまざまなリズムにまで分析が広がるきわめてスケールの大きい研究である。これまで日本におけるブラジル文学の紹介・研究は、作品の翻訳についても残念ながら散発的で質も高いものばかりとは言えず、また研究論文についても同様の評価をせざるを得ないものであったが、本論文は内容の質とスケールの大きさとで画期的なもので、これからの日本におけるブラジル文学の本格的な研究において大いなる第一歩となるものと思われる。この研究の基礎には、この論文に先立って行われた武田氏の素晴らしい翻訳『プラス・クーバスの死後の回想』がある。また、マシャードの作品についてブラジル各地で大々的に研究発表が行われた没後100年にあたる2008年のブラジルにおいて現地調査された積極的な研究姿勢にも見えるように、マシャード文学にたいする学問的情熱が本論文に結実している。

武田氏の研究は、多方面にわたる先行研究を丹念に調査されたことが窺われるもので、マシャードの作品にみられる多くの謎を丹念に解明して見せる。とりわけ『プラス・クーバスの死後の回想』の出版当時、ブラジルで盛んになっていた大衆演劇＝レビューがこの作品の語りの調子に与えた影響、『プラス・クーバスの死後の回想』に現れる年号をつうじて当時のブラジル、ラテン・アメリカおよびヨーロッパまでの政治・社会事情とマシャードの作品との関連についての分析などは説得力のある分析である。これらだけでもマシャード研究

としては出色のものと判断できるが、それにとどまらず、『プラス・クーバスの死後の回想』の文体がブラジルの人・社会・文化にまで映し出されており、さらにブラジルのさまざまな文化に見出せる特有の「リズム」にまでなっていることが分析されている。これによって、これまでブラジルのサッカー、音楽・カーニバルなどに関心をもちながらも文学には縁遠かった人々の関心を文学にも向けさせることに貢献することが期待される。

しいて気になる点を指摘するならば、『プラス・クーバスの死後の回想』のなかで重要な役割りを果たしているキンカス・ボルバの哲学「ウマニチズモ」を解説するにあたり、これが難解だからという理由で、最初にこの作品のなかからではなく、この作品より10年後に刊行される『キンカス・ボルバ』から引用して分析を進めている。ある作品を解説するのに、それよりも後に刊行されたものを援用せざるを得ないということは、その作品にどこか欠陥があるということにならないだろうか。そのような印象を与えぬように、最初からこの小説の内部から解説すべきだと思われた。

柳原孝敦委員

マシャード・ジ・アシス『プラス・クーバスの死後の回想』の独特の形式と文体を当時はやりのレビューや新聞小説との関係、ブラジルの社会や文化との関係などのうちに捉えて、作品の面白みを十全に記述し尽くそうとする試みは興味深く、示唆に富み、『プラス・クーバスの死後の回想』読解に大いに役立つものと思われる。

敢えて本論に対して疑問が湧くとすれば、それは、詩との関係が問われていないのはなぜか、という点である。本論では、劇評を書き、劇作家になりたかったマシャードが、当時はやりのレビューの形式を取り入れて小説を書いたという立場から、『プラス・クーバスの死後の回想』に見られるレビュー的な要素がつぶさに検討されている。また、作品内の読者の役割、実際の読者に喚起される記憶の質、それら呼び覚まそうとする文体上の工夫をもってパフォーマンスとの形式上の類似性も検討されている。だがそこで、詩との関係がないがしろにされているのではないか？

武田氏は小説第7章の「精神錯乱」を分析し、ここに小説の「テーゼが提示されている」ことを指摘しているが、この精神錯乱 delirio の一語は強くアルチュール・ランボーを想起させないではいけない。7章の「精神錯乱」とは、死の床にあったプラス・クーバスがパンドラによるイニシエーションを経て、死に対する見方を変え、死して後に作家となることを決意する一場であるが、であればこれはすなわち、詩的インスピレーションとしての錯乱そのものなのではないか。そのことの考察を展開して欲しかった。

ランボーが「錯乱」二編の詩を含む『地獄の季節』を上梓したのは1874年であり、『プラス・クーバス』出版(1881)出版よりも少し前のことである。マシャードはランボーを読んでいなかったのだろうか？ ラン

ボーその人ではないとしても、ロマン主義以後のフランス詩、すなわち象徴派の詩人たちをブラジルの文学界は受容していなかったのだろうか？ 詩人たちがやがて取り上げる錯乱 delirio というキー概念をめぐるの同時代の詩のありかたを考慮に入れた分析が望まれる。

こうした思いを強くするのは、第3章にいたってパフォーマンスの観点から小説を分析する箇所を読むときである。とりわけ後半部で分析した行を自由に使うやり方など、マラルメの『骰子一擲』を想起させ、最終章で扱っている「千鳥足」という態度／文体は ébrio、すなわち、「酔いどれ船」“Le bateau ivre”の「酔いどれ」と同一の形容詞である。このあたりの連関において、象徴主義以後のフランス詩の存在感を疑わないではいられない。

直截的な影響のあるなしを検討し、ないとすれば、マシャードがランボーらを知らずして「錯乱」の概念に行き着いたことの同時代性、偶発性を考察するのも一興ではないだろうか。その他にも些細な疑問は残るが、いずれにしろ、武田氏の読解の試みは高く評価できる水準にあると思われる。

柴田勝二委員

『プラス・クーバスの死後の回想』を主な対象として、ブラジルの代表的作家マシャード・ジ・アシスの文学世界を論じた本論文の中心となるのは、第1章をなす「〈X〉と〈非X〉の織りなす物語世界」で論じられている、〈X〉と〈非X〉すなわち対照的な価値をアンビヴァレントな形で表出していく独特の表現方法で、理性と狂気、ヨーロッパと非ヨーロッパ、近代と前近代といった相対峙する価値や概念が交錯しつつ現れることがマシャードの文学世界の特質を形成しているとされる。またそれはヨーロッパ文化の色濃い影響を蒙りつつも、それを相対化していくことで独自性を獲得していったブラジル文化の一つの雛形としての意味をもつことにもなる。

こうした共鳴にも見られるように、マシャードの文学世界は前近代から近代に至るブラジルの歩みと重ね合わされる性格を色濃くもち、『プラス・クーバスの死後の回想』においても語り手のプラス・クーバスの女性関係の軌跡が、同時代のブラジルの政治的な歩みと強いアナロジーの関係を示しているとされる。こうした作品内の人物関係が、同時代の自国の政治・外交の状況の寓意や暗喩をなしているのは、日本の夏目漱石にもいえることで、こうした面を備えていることが彼らをそれぞれの国における「国民作家」にした条件であったともいえる。あらためてマシャードの歴史を映し出す技法をこの論文によって確かめることができた。

マシャードの技法はこうした言説内容の次元におけるアレゴリーにとどまらず、言葉遊びや余白や無言による視覚的な効果などにおいて多様なパフォーマンスを示しており、武田氏の論考はこの作家の表現戦略の全体像を巧みに浮かび上がらせている。

やや気になったのは、マシャード自身が「千鳥足」と評する文体の非直線性と、論考全体で強調されている

「〈X〉と〈非X〉」が共在するアンビヴァレンスの表現がどのように照応しているのかが、必ずしも明確に論じられているとは思われなかったことである。対照的な価値が共在するのはすぐれた芸術作品に共通して見られる特質であり、それを実現するために「千鳥足」の文体が必要とされているというわけではない。規矩正しく分節化された文体によってもこうしたアンビヴァレンスを描き出した作家も珍しくないからである。しばしばアクロバチックなパフォーマンスも示すマシャードの文体の独自性と、その思想、歴史観の照応がもう少しきめ細かく追求されてもよかったと思われる。

しかし全体としてはブラジルの国民作家としてのマシャードの文学の輪郭が明確に捉えられており、水準の高い論文であることに疑問はない。

博多かおる委員

本論は、マシャード・ジ・アシスの『プラス・クーバスの死後の回想』の多面的な読解から、ブラジルの文化的特質に迫っていく論考である。まず、『〈X〉⇔〈非X〉』が『プラス・クーバスの死後の回想』の基本構造であることを指摘し、この仕組みを通じて個人の心情や行動、宗教的・社会的制度、西洋的な知などが転覆されることを論じている箇所は、本論の軸となる重要な部分である。

また、難解な構造をもつ『プラス・クーバスの死後の回想』の多様な要素の集合体としての仕組み、読者への多方向からの働きかけなどが指摘され、作品と民衆演劇との親和性が指摘される部分は大変興味深い。作品の受容条件を変えるという一つの目的と結びついたかたちで、作品に民衆演劇の役者と語り手のあいだに生まれるコミュニケーションを組み込もうとしたという一連の指摘は、この作品の特性を巧みに浮き彫りにしている。

さらに、読者に対する語り手の挑発が〈非・教育〉的なく〈教育〉の現れであるとし、この小説が〈非・文学〉的なく〈非・小説〉的な作品の創作を通して文学制度に対する挑戦であるという指摘を経て、ナショナリズムのもとに近代国家が繰り広げた争奪戦の〈絶対〉が〈非・絶対〉となる仕組みが本作品に反映されているという指摘が行われ、ブラジルがヨーロッパ伝来の〈X〉を追いつつその〈非・X〉を見いだしていった姿が作品に刻まれているとする展開には、やや論の展開が早急な印象を与える箇所もあるが、作品の分析からダイナミックにブラジル文化の特質を描き出す筆者の手腕が示されている。

やや疑問に思った点を強いて挙げるならば、まず、章のあいだのつながり、一度取り上げられた事項が深められる過程がかなり先にあり、そのあいだの連関が一読するとはじめの段階ではわかりにくいような箇所がいくつかある。そのためか、やや解析不足な印象を与える箇所が散見される。例えば「西洋的な知が逆転される」といった点について、パスカルの引用などがいかなる意味でアイロニーの構造に取り込まれているのか、より詳細な分析があったらさらに刺激的な論の展開が期待できたであろう。テキストと身体性の問題についても同様のことが感じられた。語り手の身体、あるいは登場人物の身体とテキストの関係は一様ではなく思われ、その複数のかたちをふまえることによりさらなる論の深まりが期待できたのではないかと。作品中のメタ言語とレ

ビューの「客席の旦那」といった存在の役割の類似、読者と観客の位置の平行性についても、もう少し丁寧な考察が欲しいと思われる箇所がある。また、読者への考察を豊かに含んでいる論考であるがゆえに、論文における「私」「読者」という言葉の使い方から、やや粗い印象を受ける箇所がある。

ともあれ、自明とされている概念<X>が都合や必要性に応じて<非X>に入れ替わるような構図を軸として、テキストの細部の読みからブラジル社会や文化を照射する本論は、文学作品の内部の分析にとどまることなく、動的な形態において捉えるものであり、社会や歴史を解説することにも成功した、優れた論文であると考えられる。

本審査委員会では、上記のような各委員の評価を踏まえ、2013年7月13日に本学において最終試験（口頭試験）を行った。約90分にわたる各委員からの質問や講評にたいし、武田氏は、論文の背後にある問題意識と文献資料的な知識をもって、十分に説得力ある応答を行った。本論考が、長年の研究蓄積の成果としてあることを確信させる対応であったと考えられる。

こうした結果を踏まえ、本審査委員会は、武田千香氏の博士学位請求論文が、博士論文にふさわしい学術的水準に充分達しており、博士（学術）の学位を授与するに値するとの結論を全員一致で承認した。